

書評：平野 勇(2008)ジオパーク—地質遺産の活用・オンサイトツーリズムによる地域づくり。オーム社。

鈴木 晃志 郎 *
Koshiro SUZUKI

I. はじめに

本年(2009年)8月24日、糸魚川、島原半島、洞爺湖・有珠山の三件が日本で始めて世界ジオパークへの登録を認められたとのニュースが各誌を飾り、ジオパークは一躍脚光を浴びた(読賣新聞 2009年8月24日)。また同年10月28日には、第6回日本ジオパーク委員会が開催され、山陰海岸が世界ジオパークへの加盟申請地域に選ばれ、恐竜溪谷ふくい勝山、隠岐、阿蘇、天草御所浦が日本ジオパークに認定された(福井新聞 2009年10月28日)。

すでに地質学や地理学を中心に、ジオパーク推進活動には学会でも大きな注目を集めていた。日本地質学会は2008年9月に、「地域振興と地質学—ジオパークが開く地域と地質学の未来」と題するシンポジウムを開催していたし、月刊地理では53巻9号(2008年9月)で特集「ジオパーク」を、地図中心では440号(2009年5月)で「ジオパークへ行こう!」と題する特集をそれぞれ組んだ。2007年には全国地質調査業協会連合会と地質情報整備活用機構が共同で、『日本列島ジオサイト地質百選』を刊行。地域振興のひとつのツールとして、ジオツアーや環境教育の拠点として、あるいはジオパークに関わる人材育成の面で、ジオパークには大きな期待が注がれている。このような追い風ムードの状況下で、ジオパークに関して平易に解説する入門書が登場したことは、それ自体が非常に意義深いことといえるだろう。

著者の平野 勇氏(工学博士)は、京都大学大学院工学研究科資源工学専攻の助教授を経て、現在は財団法人国土技術研究センター常任参与を務めている人物である。地質学が専門ではない評者は斯界に明るくはないが、研究業績から窺える氏の専門領域は地震学であり、京都周辺の地震活動に関する基礎研究から出発したのち、徐々にダムや道路のり面、トンネル基礎の岩盤など、工学的かつ応用的な側面に取り組んだ研究へと方

向性を変えてきた方のようだ。本書も、地質学(特に活断層など)の研究者によって書かれた、一般向けの解説本であることを念頭において読むと、中身の見え方が変わってくる性格の本ではないかと思われる。

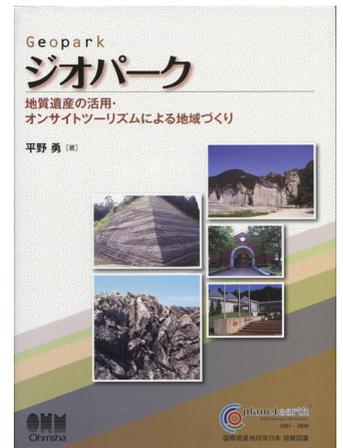
II. 本書の背景

本書について触れる前に、ジオパーク推進運動が生まれてきた背景について、若干触れておく必要があると思われるので、簡単に紹介しておこう。

ジオパークの発想そのものは意外に古く、日本でも戦前に田中薫が提唱した「氷河公園」などにその源流をみることができる。また本書でも、1991年には糸魚川市にあるフォッサマグナ・ミュージアムが現地の地質観察用のフィールドをジオパークと呼んでいたとしている。

しかし、“地質分野の世界遺産”としてのジオパークが注目されるようになったのは、2001年にユネスコ執行委員会が各国のジオパーク推進活動を援助することが決まり、2004年に世界ジオパーク委員会(GGN)が設立されてからのことである。その直接の源流を辿ると、1997年にユネスコで提唱されたジオパーク・プログラム(UNESCO Geopark Programme)にまで遡ることができ、これを受ける形で2000年に誕生した「欧州ジオパーク・ネットワーク(European Geopark Network)」に行き当たる。現在までのところ、ジオパークのプロジェクトは欧州主導で進められており、特にドイツの地質学者や観光学者たちが主導的な役割を果たしてきたようである。

ドイツでは、ジオトープの対概念として提示されたゲオトープ(Geotop; 平川 2005)や、地質多様性(Geodiversity; Gray 2008)などを通じて、1990年代後半から学際的なディシプリンとしてのジオツーリズムへ



*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
e-mail: mapping@tmu.ac.jp

の意識が高まった。ジオツーリズムの用語自体も、1998年のドイツ地学協会の年次総会において、後に欧州ジオパーク・ネットワークの評議員となる Marie-Louise Frey によって定義されたものであったという(Frey et al. 2006, pp.97-98)。ドイツでは、北ラインラント州ブルカンアイフェル(Vulkaneifel)地域の火山地形を生かしたジオパークの整備が、すでに 1980 年代の終わりから進められており、この事業が実質的にジオパークのパイロット・プロジェクトとして機能した側面がある。

2004 年、世界ジオパーク委員会が設立され、同年 6 月 27 日から 29 日にかけて、中国の北京で第一回世界地質公園大会 (First International Conference on Geoparks) が開催されて、保全・教育・ジオツーリズムを柱とするジオパークの運営ガイドラインが示されると、日本でもジオパークの推進活動が本格化した。リーダーシップを担ったのは、日本地質学会や GUPI (NPO 法人地質情報整備・活用機構)、産業技術総合研究所などである。また 2008 年からは、世界遺産登録におけるイコモスや IUCN の国内委員会と同様の役割を担う機関として日本ジオパーク委員会 (JGN)が発足し、GGN への加盟申請候補の推薦や、日本ジオパークの認定などを行う制度が整いつつある。

日本でジオパークがこれだけ短期間に推進されてきた背景には、「地震、火山噴火、土砂災害などが頻発する日本列島では、地球科学は生命の安全に関わる科学であり、市民にもっと親しまれ活用されるべき科学である」にもかかわらず「現状はそうっていない」ことから、「ジオパークを通じてこの現状を変えよう」(渡辺 2008, p.13)との趣旨が根底にある(今岡 2009)。また、特に地方大学の場合、その存在意義を主張し続けるための手段としてジオパークに掛ける期待が大きいという側面もあり、これはジオパークの関連分野全体においても当てはまる側面であろう(天野 2008)。2009 年現在の状況は、世界ジオパークへの登録までの審査や推薦制度の整備がようやく形を整え、これから普及と啓蒙に向けた試みへと移行する段階であり、本書の登場はこの点で、時機を得たものといえる。

Ⅲ. 本書の概要・総評

本書は、地質学の専門家による、日本初のジオパークの概説書としてきわめて有意義な書籍であり、全体は大きく 2 編から構成されている。

「オンサイトツーリズムとオンサイトパーク」と題する第 1 編は、情報化社会において、敢えて実地に体験することの重要性を説く。TV やインターネットな

ど他者によって加工されたプロセス・メディアインフォメーションへの過度な依存は、情報自体の価値やそれを生み出す方法、苦勞を学ばないまま知識を受動的に吸収するため、知識を得るための技術も身につかないとしたうえで、自ら目的をもち、工夫して情報を獲得することが必要な、臨地型の(オンサイト型の)観光形態として、ジオパークのもつ教育的効果や意義が主張されている。次に「ジオパーク」と題する第 2 編は、地質と人間との関わりを論じ、ジオパークがなぜ必要なのかを解説したうえで、関連主体や事業化までのフローを説明するという体裁になっている。この体裁からも窺えるとおおり、本書はどちらかといえばジオパークの認定や推進に向けて活動する実務家向けの概説書の体裁を帯びている。特に、主題がそのまま掲げられる第 2 編については、提示の順序に若干の疑問を感じる程度で、総じて良く整理がなされており、基礎研究で培った専門的知識を背景に、実務畑で活動してきた著者のまなざしを感じて好感を持った。

しかしながら、読後にはいくつか気になる点が残った。なかんずく、著者が殊の外思い入れを持っているらしい「オンサイトツーリズム」という概念について書かれた最初の 50 頁ほどの部分は、必要な情報をバランス良く要約した概説書としての後半部分との整合性を著しく欠き、概説書としてのバランスを悪くしているように感じられた。この 2 編はページの量的な面においても第 1 編の約 50 ページに対し第 2 編 100 ページで後者が倍近くあり、しかも後者(第 2 編)の標題が本全体のタイトルと同じ「ジオパーク」になっている。第 2 編のタイトルが本全体の標題と同じ「ジオパーク」ならば、第 1 編は一体どういう位置づけなのか?との疑問を禁じ得ないのは、評者だけではないであろう。

著者はこの第 1 編で、「オンサイトツーリズム」に「バーチャルサイトツーリズム」と「架空テーマツーリズム」を合わせた 3 つのツーリズムが、観光形態の三類型であるという自説を展開する。管見の限り、こうした分類でツーリズムを分類した研究を評者は他に知らない。著者のオリジナルな分類であろう。しかし、この三類型や、オンサイトツーリズムの用語は自明のものとして冒頭から出現し、前半の話は、オンサイトツーリズムの優位性を軸に進む。唐突さは否めない。また、書籍のタイトルが「ジオパーク」であるにもかかわらず、最初の 50 頁(第 1 編)にジオパークの話が全く出てこないところも、第 1 編のバランスをいっそう欠いたものになっている。本のタイトルであるはずのジオパークの話は脇へおいたまま、ひたすらオンサイトツーリズムについての主張が続くのはいかにも奇妙であ

り、独善的な印象を禁じ得ないのは評者だけではないだろう。むしろ最初の 50 頁は後半へ移し、ジオパーク概念成立の経緯 (11 章) やジオパークのコンセプトおよびメニュー (7 章)、関係主体・組織構造 (8 章、9 章) など、基礎情報をひととおり語ってから、思想的背景としてオンサイトツーリズムやオンサイトパークを語った方が、その後続く“ジオパークがいかにつーリズムと密接に関わり合っており、それゆえに事業化可能か”の処方箋を語る段 (10 章) へもスムーズに話が繋がり、読者も本の構成が見通せるようになったのではないだろうか。

また、50 頁も割き、英文を併記するなど、著者にとってオンサイトツーリズムは、ジオパークの意義を説明する上で必要不可欠な概念となっている。ならば、たとえ概説書といえども、このオンサイトツーリズムというテクニカルタームについてはより明確に用語の定義を示す必要があるし、関連分野での概念としての受容度、類似の概念との違い、概念成立の経緯などについて、もう少し丁寧な解題が必要だったのではないだろうか。

学習者の意識を高めるために、臨地の経験を重視すべきだとの主張そのものは、目新しい考え方ではない。環境学習における野外実習の効果を指摘する研究者たちがそうである。Flowers (2010) では、子ども向けの環境学習を行う際、自然環境下での「臨地の(place-based)」学習プログラムを含めることの重要性が指摘されている。Van Loon (2008) も、地質学が地球科学の他分野に比べて教科書的な知識だけでは理解しにくいことから、幅広いフィールドワークなしには学習効果が挙げられないとしている。ただし、彼らはあくまで、野外実習を通じて直接経験することの重要性を説いているだけであり、特定の環境資源に接する(on site する)ことに特段の重要性を見いだしているわけではない。

また学習効果そのものを検討する教育学などの研究分野では、IT 学習を既存の高等教育プログラムの中にブレンドすることで、より高い効果を挙げようとするブレンド学習(Blended Learning)がトレンドとなっている(Bliuc *et al.* 2007; Garrison and Kanuka 2004)。ここでは、テキストベースの教科書的な学習や現地実習は従来型の学習プログラムと位置づけられ、オンライン学習や視聴覚学習といった IT 学習をブレンドして学習効果を高めることの重要性が説かれる。オンサイト型の環境学習をこれら IT 学習と対置させ、前者を称揚する本書の主張は、これらとも異質である。ちなみに、ブレンド学習の研究では、実地体験に基づく学習に対して「対面型の(face-to-face)」という表現が用いられ、

ここでもオンサイト型の学習という概念や語句は使われていない。

現地に出かけ、問題にじかに触れるという意味では、当事者たちが地域の抱える問題を学習・理解して、自発的な地域運営が行えるよう促す、参画型アプローチ (Participatory approach) との接点も考えられる (Pretty 1995)。地域政策などの分野では広く知られたアプローチであるが、この領域でも、主に議論されるのは地域の問題解決プロセスへの当事者の主体的な参画であり、それが現地実習に基づくかどうかは二次的な関心事にすぎない。もちろん、管見の限りオンサイト云々の表現が定着している様子はなかった。

本書評を書くにあたり、他にもかなり広く関連分野の主要誌にあたってみたが、オンサイト (onsite / on-site) ツーリズムという用語を用いたツーリズム領域の研究論文を見つけることはついにできなかった。

このように、他の概念との関連性も明らかでなく、実証的な裏づけも乏しい概念や用語を入門書にいち早く掲げ、自説や新造語の拡散をしようとする姿勢は、喩えは悪いが評者には一種のマーケティング行動のように映る。こうした著者の姿勢が、大目的であるはずのジオパーク概念の啓蒙を果たす上での瑕疵になっては些か勿体ない気がするが、いかがであろうか。

以上、本書には気になる点もありはするものの、ジオパークの普及啓蒙のためには、手軽に読めるこうした概説書の存在が必要不可欠であることは申すまでもない。類書のない状況下で、敢えて火中の栗を拾った著者の営為には敬意を表したい。今後の改訂に際して、評者の感じた些末な違和感が解消され、正しくジオパークの入門書として万人向けのものになることを期待したい。

参考文献

- 天野一男(2008): 地方大学とジオパークー茨城大学における
ころみ一. 日本地質学会学術大会講演要旨: 14.
- 今岡裕作(2009): 環境地質学にもとづく日本のジオパーク論.
応用地質 49(6): 350-357.
- 岩松 暉・星野一男(2005): ジオパークと地質遺産の保全・活用. 地球環境 10(2): 185-196.
- 平川一臣(2005): ドイツのゲオトープに関する基本情報. 地球環境 10(2): 197-206.
- 渡辺真人(2008): 日本のジオパークーこれまでとこれからー.
日本地質学会学術大会講演要旨: 13.
- Bliuc, A-M., Goodyear, P., and Ellis, R.A. (2007): Research focus and methodological choices in studies into students' experiences of blended learning in higher education. *The Internet and*

Higher Education 10(4): 231-244.

Flowers, A.B. (2010): Blazing an evaluation pathway: Lessons learned from applying utilization-focused evaluation to a conservation education program. *Evaluation and Program Planning* 33: 165-171.

Frey, M-L., Schäfer, K., Büchel, G., and Patzak, M. (2006): Geoparks - a regional, European and global policy. In Newsome, D. (ed.) *Geotourism: Sustainability, impacts and management*. Oxford, Elsevier Butterworth-Heinemann: 95-117.

Garrison, D.R. and Kanuka H. (2004): Blended learning: Uncovering its transformative potential in higher education. *The Internet and Higher Education* 7(2): 95-105.

Gray, M. (2008): Geodiversity: developing the paradigm. *Proceedings of the Geologists' Association* 119: 287-298.

Pretty, J.N. (1995): Participatory learning for sustainable agriculture. *World Development* 23(8): 1247-1263.

Van Loon, A.J. (2008): Geological education of the future. *Earth-Science Reviews* 86: 247-254.

(投稿 : 2009 年 12 月 16 日)

(受理 : 2010 年 1 月 25 日)